

**Q.** グループホームの利用者で認知症が進行された方にとって、地域とのつながりはどのような意味を持つのでしょうか。

**A.** 地域密着の地域とは、その人の生活圏をイメージしています。人が生活を確立していくためには、生活圏の中にスーパーやクリーニング店、警察署や郵便局、銀行などさまざまなものが存在していることが必要です。これらと関係を持ちながら、これらを使いながら、利用者の望む暮らしをしましょう、というのが地域密着型サービスなのです。ですから、ここでは非常に関係力が問われます。地域密着型サービス事業所と地域がどんな関係力を持っているのか、利用者と地域がどういう関係力を持っているのか、が鍵になってきます。

認知症の人たちだからといって、分からなくなっているなんていうことはありません。認知症の人たちは、いろいろなことが分かっていて、感情も我々と同じように残っています。認知症の人の行動はすべて理由があり理解できる、という前提で取り組みをしているのがグループホームです。そもそも、認知症の人は地域で暮らせる人たちであり、地域との関わりがあるからこそ、認知症があっても有する力を活かしながら自分らしく暮らし続けていけるのです。地域密着型サービスはそれを支えるサービス機関であり、そのためには何がいるのかということを見つけ、作り上げているのです。

認知症の人が地域の中に出かけていくことにより、いろいろと地域が変わっていきます。変えていく力を持っている人たちなのです。これは、我々が地域に説明して回るよりもはるかに大きな意味を持っています。例えば、道に迷ってしまった認知症の人に対して、警察官は認知症の人を理解していないと、せいぜいパトカーで無線を使いながらオロオロするだけになってしまいます。ところが、警察官が体験的に認知症の人たちはこういう人たちで、こういう特性があるということを理解していくと、もともと安全についての知識はとて高く持っていますから、どういうふうにセーフティーネットを張ればよいのかということに結びついていくわけです。認知症の人が地域と関わっていくことで、安心して暮らせる地域づくりにつながっていくのです。認知症の人たちは、貴重な役割を実は果たしているのです。

(評価機関学習会 サンライフたきの里施設長岩尾貢氏)